

設計プロポーザル応募者各位

2012年5月19日、筑波大学附属高等学校で実施した創立120周年記念館（桐陰会館）設計プロポーザルのプレゼンテーションに参加して頂き、ありがとうございました。同日のプレゼンテーション後の選定委員会において、下記のように決定させて頂きましたのでお知らせ致します。

尚桐陰会館の建設は、これからも様々なハードルを越えていかなければなりません。皆様にはこれまでに変わらぬご支援とご協力をお願い致します。

当選 登録番号09 川村純一案

2012年5月25日

120周年記念館（桐陰会館）建設委員会

## [ 選定理由 ]

この提案の特徴と魅力は、玄関を一カ所にしたことにある。今回の敷地は附高・附中キャンパスの一画旧中学校プール跡地であり、当校体育館と隣接する文京区立音羽中学校に挟まれた南北に抜ける環境にある。会館へは主に外部者・同窓会使用の道路側と、学校・生徒が使用するキャンパスのグラウンド側からの二つのアクセスがあり、生徒の靴の脱ぎ替えが設計条件の一つとして求められた。

他の提案は南北2方向のアクセスから2カ所の玄関を設け、その間を廊下、ホールやギャラリーなどで結ぶことを軸に展開した計画であった。けれども複数玄関の構成には相互の距離が離れるなど管理上の問題があり、生徒の靴の脱ぎ替えには更なる工夫が必要と思われた。

それに対して川村案は北から入る玄関に、南から外部の長い軒下通路を介して生徒たちも入れるように解かれていた。一カ所から入る玄関、階段と吹抜けをもつエントランスホールを介して、南北両ゾーンに諸室が無理なく配置され、全体をコンパクトにまとめることができている。南側1階に2層分の天井高の講義室、北側1階に同窓会事務室、便所と茶室、2階に小さなデッキでつながれた資料閲覧室と会議室という構成である。

東西に長く取られた講義室は2室分割利用時もスムーズで、南側に設けられた屋根付きの広いデッキから、一列に並んだ樹木のスクリーンを介して生徒たちの活躍するグラウンドが眺められる一方、資料閲覧室から延長されたスペースによって2階からも見ることができ、茶室との一体的な使用も可能であり、落ち着いた空間でありながら他の空間との程よいつながりを確保することによって、多様に使える構成となっている。

また北側諸室の扱いも適切で、2階資料閲覧室と会議室は道路境界際の既存ヒマラヤ杉が開口部一杯に広がる気持ちよい空間である。特に配慮が生きているのは、日表となる北庭を生かした茶室であり、このことによって日本文化の伝統を含む深い魅力が会館に加えられている。

実はこの案を端的に言い表すことは難しい。もしかしたら多数が参加するような設計コンペティションでは、目立たなくて落とされてしまう案かも知れない。けれども与えられた敷地環境と設計条件に的確に応え、小気味よく解いた構成の数々を織り込んだ空間には、大きな住宅のような“居心地の良さ”が感じられる。声高に個性を主張することが多い現代社会の中で、むしろこの自然さ、率直さ、的確さから生まれた静かな主張と落ち着いた空間の中に、附属らしさが宿り、世代を超えて伝統が育まれていくように思われ、われわれが求める教育会館に最も相

応しいと判断された。

また川村純一氏は長年に亘り建築設計事務所アーキテクトファイブを主催し、彫刻家イサム・ノグチによる札幌モエレ沼公園の構想を実体化した設計者として広く知られている。建築設計の豊富な経験、建築家としての優れた知見、附属らしい飾らない人柄からも適任と考えられる。

最後にプレゼンテーション後に開かれた選定委員会の審査経過について、少し報告しておきたい。今回の選定委員は建築専門委員3名・中高校の先生代表4名・中高父兄代表2名・桐陰会幹事1名の他に、建築の大切さや面白さを伝えるために中高校生徒代表（男女4名）にも加わって貰った。生徒たちは臆することのない発言と、的確な判断をする頼もしい後輩たちであった。

委員会では説明を受けた8作品について順番に討議を重ね進めた。いずれの案もアイデアに満ちた力作であったが、中でも登録番号04 杉浦英一氏の“中庭と「木」のホール”案、同06 伊熊昌治氏の“エントランスホールでの交流の場を取る”案が注目された。けれども杉浦案では中庭と靴の脱ぎ替え、木構造の予算的な不確定さが、伊熊案では大スパンの門型フレームの必然性や生徒の北棟資料閲覧室への入りにくさなどが指摘され、前記の理由から審査員の総意により川村案を当選と決定した。

選定委員代表 片山和俊